



# 故郷を思って

島根県代表

しまねけんやすぎしりつひろせ  
島根県安来市立広瀬中学校3年

たなべ ひかり  
田邊 光

限界集落、その言葉を聞いて何を思いますか、きっとただならない雰囲気だけは伝わると思っています。限界集落とは、65歳以上の高齢者が半数を超え、村落共同体としての機能が果たせなくなり、消滅の恐れがある地域のことです。僕は、初めてこの言葉を知ったとき、自分の育ったところもそうなりつつあるのではないかと、それなのになぜ誰も手を打たなかったのか、放っておいたのかと一人憤っていました。

僕のふるさとの比田は、山々に囲まれた美しい高地ですが、過疎化により失われつつあります。2つの小学校が1つになり、この5年で現在の児童数は約半分まで減少しました。3年前には中学校もなくなりました。このままでは、比田は多くのお年寄りと少数の子供だけになってしまいます。

では、なぜ比田は過疎となったのでしょうか。なぜ人は減り続けるのでしょうか。働くところ、病院、文化施設、大型店などがなく、生活が不便だということが考えられます。買い物1つするにしても時間がかかり、生活に負担がかかります。実際、僕たちがバスで中学校へ通うにも1時間20分もかかることもあります。これからも、比田を捨てて外へ出てしまう人達が増えるのではないかと。このまま過疎が進んでいくことをもどかしく思い苛立っていました。

そんな僕に、希望を取り戻すきっかけを与えてくれたのは、比田の自然の美しさでした。今年の6月頃、友達と2人で猿隠れ山に登り、天に近づいて空と一体になったかのような感動を味わった帰り、山の中の水溜りに無数のオタマジャクシが必死に生きようとしているすがたを見たとき

僕は思い出したのです。何もしないどころか比田には、頑張っている人がたくさんいることを。

僕は毎年、春夏秋に家の農作業を手伝っています。それは、田畑の草取りや肥を撒く仕事です。家族一丸、幼い妹達も手伝います。一日中働き、疲れて家に帰ると、「ほれ」と言って祖父が財布からお小遣いをくれます。そのときの祖父の顔はとても優しげです。きっと祖父は、自分の育った場所に僕たちがいて、昔からある農業を受け継いでいることがうれしいのだと思います。

祖母は比田の婦人達と一緒に笹巻きなどを作って売っています。毎朝5時に家を出なければならないのは辛いと思いますが、「地域活性化のためだわい。」と頑張っています。祖母は比田の希望の灯を消すまいと思って必死になっているのだと思います。そのほかにも、小学生のためにそば畑を貸してくださる方々、もの作り教室で竹とんぼの作り方を教えてくださるおじいさん達、無形文化財である比田踊りを残そうと努力している人達もいます。その姿を間近で見、自分も一緒に参加し、汗を流してきたのです。それなのに、比田の過疎化を止めるために誰もなにもしていないなんてなんと愚かだったのだろうと気づきました。

僕は、僕を守り育ててくれた比田とそこに住む人達の心を受け継ぎたいと思います。不便な中でも、互いに助け合い、支え合うことの暖かさを大切にし、比田の生活がよりよいものになるよう、今まで以上に農作業や文化祭などの地域の行事に積極的に参加しようと思います。

僕は、ふるさとを、限界集落などにはさせません。